

# 倫理に照らして柔軟に

上 廣 榮 治

今年、二〇〇〇年は日本がオランダとお付き合いを始めてから四百年になるということで、この四月十九日から各地でいろいろな催しが行なわれます。

ちょうど四百年前の一六〇〇年、あの天下を分けた関ヶ原の戦いの半年ほど前、九州臼杵湾の沿岸、大分県佐志生さしうにリーフデ号というオランダの木造船が漂着しました。この船の船長であったヤコブ・クアーケルナツクという人の回想録に、その日が四月十九日だったと記されているのだそうです。

リーフデ号といえは、この船に乗っていたヤン・ヨーステンとウイリアム・アダムズが徳川家康に仕えて、以来今日に至るまでの日蘭修好しゅうこうの端緒たんしょを開くことになったことは、よく知られています。

ところで、このリーフデ号は実に変な経緯で日本にやってきたようです。二年前の六月にロツテルダムを出港したときには、五隻で船団を組んでいたのですが、暴風雨にあつて僚船りょうせんとはぐれ、そのうえ水も食料も不足して病人が続出。食料を求めて上陸した島では襲撃にあい二十数人が殺されるなど、百

十人いた乗組員もたったの二十四人となり、そのうち歩ける者は数人しかいなかったということです。そうした数々の苦難に遭遇しながらも、なんとか日本へたどり着くことができたのは、何故だったのか。まず第一に、次々と襲う苦難にもめげず、くじけることなく、所期の目的を遂行しようとしてやまなかつた不動の信念、志操の強靱さにあるでしょう。

しかし、それより以上に私が感心するのは、所期のプランに囚われず、「柔軟に」臨機応変の処置をとり続けたことなのです。当時、ヨーロッパから東洋を目指す船は、アフリカの南端の喜望峰を回ってインド洋に出たのですが、暴風雨のためコースを阻まれたり、インド洋を横断し、南米大陸の南端を回って太平洋に出たのです。さらに船は太平洋を横断中に、インドばかりが東洋ではないとして、行き先を未知の日本に変更します。実に柔軟にして大胆な方針の変更であり、臨機応変の措置でした。

さて、私たちの人生も、このリーフデ号の航海とよく似たところがあるように思えるのです。かの船の大目的が東洋へ向かうことであつたように、私たちの一生も「仕合わせな人生」という大目標に向かって、波を切つて進んでいるのです。そして、その行く手には予期せぬ出来事が次々と起こるといふ点でも、人生は航海とよく似ています。人生の節目節目には大きな、そして日々に小さな予定の変更を、常に余儀なくされるのです。予定のコースを順調に進めないのが人生だといつてもよいでしょう。

しかし多くの場合、人は予定通りに事が進むことを望みます。予定通りの進行にこだわるあまりに、最終的な大目標を忘れてしまう場合もしばしばあります。

一流の学校に進学して一流企業や官庁に就職して、というコースを予定して、まだ心も身体も準備が整わないうちから受験勉強に明け暮れ、希望した学校の受験に失敗したからといって何年も浪人して、

情緒に變調をきたすといった例などは、その愚劣な例の最たるものでありましょう。

もつと私たちに身近な例でいえば、会場の運営にあたって予定を立て、予定通りの進行に意を注ぐあまりに、会場運営の本義を忘れてしまうという場合があります。形に囚われ本質を見失うことはないでしょうか。

職場でも、間違いをおかさぬようにと思うあまりに、あれこれと煩雜はんざつで無意味なチェックを繰り返し、何のためにそれをしているのかもわからなくなっている例などは、どこにも無数にありそうです。

夫婦や親子関係などにおいても、所期の思い込みによって、かえって事を壊してしまう場合が少なくありません。夫というものは、妻というものは、このようにあらねばならない、かくあるべしと頑かたくに思い込んで、少しでもこれに外れると容赦ようしやできずにいさかいを起こすといった場合です。家族が目指す大目標は何かを忘れて、目先の事態にうろたえてしまうのです。

もしリーフデ号が、当初の予定通りに進むことにこだわっていたとしたら、彼らは決して日本に到達することはなかったでしょう。幕府が鎖国政策をとった後にも、オランダだけはヨーロッパで唯一の交易国として日本と関係を結び続けるということもなかったはずです。リーフデ号は、大胆にそして柔軟に予定のコースを変更することで、東洋貿易の拡大という大目標を達成することができたのです。

私たちの人生においても、同じことではないでしょうか。大切なのは倫理に添って仕合わせな人生を実現することなのです。所期の予定とどれだけコースが変わろうとも、その時その場で大目標に照らして積極的かつ柔軟に道を選び方策を立て、前向きに努力すればよいのです。倫理にさえ外れなければ、必ず仕合わせという大目標は達成されるのです。

世の中は常に変転してやまないものです。今日の一流企業が、十年、二十年を経ても一流であり続け

る保証はないのです。問題なのは、突然の破綻はたんに見舞われたとき茫然自失ぼうぜんじしつしたり、絶望して再起不能に陥つたりすることです。あるいは、新しい事態にうろたえて、倫理に外れて妄動もうどうし、大目標を見失ってしまうことです。これでは、仕合わせという大目標にたどりつくことは到底できません。

そもそも、予定のコースなどというものは、未熟で何も知らないといってもいい私たちが、勝手に思い込んで定めた曖昧あいまいなものでしかありません。こんな手順でこんな風に事が進めば仕合わせになれるに違いない、と勝手に憶測おくそくしただけのものなのです。つまり、予定のコースに縛られるということは、「私心ししんに囚われる」ということでしかないのです。

孔子は、四つの陋劣ろうれつな心を絶つたという話が『論語』にあります。「子、四を絶つ。意なく、必ひつなく、固なく、我なし」というくだけりです。

「意」はこうしたい、ああしたいという勝手な思いです。こうであるべきだ、ああでなければならぬといった思い込みも、予定のコースもこれに当たります。「必」は絶対にそうするという無理押しで、「固」は固執。「我」は自己への執着です。これらの心に囚われている限り、自分の利己的な思いを周囲に押しつけることになり、周りを不幸にしてしまいます。人生の大目標は「我も人ももの仕合わせ」なのだということを忘れて、とんでもない落とし穴に落ち込んでしまうのです。

いま、順調にいつている人も逆境にあると思つている人も、誤つた頑な思い込みに囚われてはいしないかと振り返つてみていただきたく思います。わが会の実践の基本は現実大肯定なのです。現実を直視して、無理押しをせず、自分の思いや予定に固執せず、すべてをあるがままに受け入れて、倫理に照らして柔軟に、今と明日の生きるべき道を発見すること。それこそが、仕合わせという大目標に至る、過つことのない生き方であるのです。